
十段跳びのなにが悪い！

夜太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十段跳びのなにが悪い！

【ZPDF】

Z0025W

【作者名】

夜太郎

【あらすじ】

「ぐぐく普通の高校一年生である亮一のもとに届いた一通のメール。『付き合わないか?』という内容のそれは、学園トップの美貌を誇る明日香からであった。

『付き合わないか?』

そんなメールが来たのは午後八時。夕食が済み、部屋のベッドで転がつていたときだつた。

新高校一年生の亮一は、勢いよく上体を起こし、ケータイの画面を見む。

「どういうことだ?」

本文の下に、名前があった。

時倉明日香。一年生から一緒のクラスになった女の子で、これまで面識はなかつた。クラスでも一言一言交わしたことはあるが、メールアドレスも知らない。そんな子がどうして突然メールを送つてきたのか。

と言づか、付き合ひについてどういう意味だ?

亮一はあぐらを搔き、深く深く考え込む。

恋人同士になつてといつ要求の意味での告白? それとも、遊びに付き合えという誘い?

どちらも信じられない。先程も説明したが、アドレスさえ交換していない仲なのだ。

「これじゃあ三段跳びだ」

亮一は腕を組み、唸る。かれこれ一時間以上も唸つっていた。

明日香の容姿を思い出す。彼女は、学園でも一、二を争うほどの美人だ。パー・マ・掛かつた美しく長い髪。少し鋭い目、宝石のような瞳に一度でも捉えられた男子は一瞬で恋に墮ちるという伝説を現在進行形で残す少女。そんな子が、どうして……しかも唐突に。

やつぱり遊びの誘いだろう。その説明を入れ忘れたのだろう。浮かれてしまいそうな気持ちを殺し、亮一はそう結論付けた。そして明日香に、『どうしたの? 遊びの誘い?』と訊ねることにした。

返信ボタンを押し、登録し終えたアドレスに本文を打ち込んでい

く。一応、題名に自分の名前を入れ、送信ボタンを押そうとした瞬間。

電話が鳴った。

知らない番号だった。一瞬イタズラ電話かと思つたが、亮一の頭には明日香の顔が浮かんでいる。

もしかして？

恐る恐る電話に出る。
すると……。

「遅いっ！」

耳をつんざく怒号が響いた。

「え？　え？」

「どれだけ待たせるつもりだ！　お前が家にいることは調べがついているんだ！　どうして返事をしない！」

「あ……えつと、時倉さん？」

「明日香だ！　名字で呼ぶな！」

「ええ？」

亮一は無意味に視線を動かす。どこか一部分でも体を動かしていないと、混乱の波に飲み込まれる気がした。

「えと……返事は今送ろうとしてたんだけど」

「本当か？　で、YESとNOどっちだ？」

「どっちかって言われても……あのメールってどうこいつ意味だったの？」

「告白に決まってるだろうが！」

一語一語がくつきりはつきりした再びの大音量に、亮一は思わずケータイを耳から離した。

「お前は付き合えと言われて、ほかになにを想像するんだ…」とは、離したケータイから響いた声である。

「遊びの誘いかと思つて」

再びケータイを耳に当てる亮一が言つと、「なるほど」と反省した声が返ってきた。

振幅の激しい子だ、と亮一は感心する。彼の交友範囲にいる人は、比較的おとなしい人物が多い。亮一本人も、活発なほうではない。だから、尙更不審に思えてくる。罰ゲームの可能性も考えたが、「じゃあ、改めて言おう。恋人になってくれ」

明日香の真摯な声が電話口から伝わった。

亮一は「はあ」と生返事をする。それが瘤に障つたのか、明日香がまた怒鳴ろうと喉を開いた。だが瞬間、「訊きたいんだけど」と彼女の怒鳴るタイミングを亮一は潰した。

「言つてみろ」

「どうして俺なの？ 時倉や」

「名字で呼ぶな。明日香だ」

「……明日香ちゃんと話したことって何回かしかないし」

思い出せないほど希薄な話はほかにもあつただろうが、こうして問答を繰り返す『会話』は初めてなのである。

「お前、覚えてないのか？」

「え？」

「まつたく……」

不機嫌に息を吐き出す音が伝わってきたが、怒鳴ることはなかつた。

なんだか、呆れられてる？ 亮一は不安に思えてきて、記憶の川を遡行する。

明日香との交流。なにがあつたか？
挨拶する程度。ちょっとぶつかって謝った程度。それぐらいしか、記憶にない。

明日香が不機嫌になるほどのことなんて、あつたのだろうか。

亮一の頭が熱を高めていったとき、「この前」と明日香の呟きが聞こえた。

「私どぶつかつただろう？」

「う、うん」

「そのとき、私がこけただろう？」

「うん……」

「で、お前が手を差し伸べてきて、私を立ち上げさせてくれただろ

う？」

「さうだね

「うむ。やつこいつことだ」

沈黙の三浦リーダーが亮一の部屋を埋めていく。

亮一は固まっていた。「うむ。そういうことだ」って? 「うむ。

そういうことだ」ってつまり……。

「いやいやいや! おかしいでしょ! たつたそれだけ?」

「それだけとはなんだ! 人が勇氣を振り絞つて告白したというのに!」

そういえば、本人の語氣は荒いが告白はメールを選んでいる。意外に恥ずかしがり屋? なんて亮一は思つたが、それは置いておく。「だつて俺がやつたことって手え貸しただけじゃん!」

「それで惚れたと言つているんだ! 一日惚れだ! それぐらい分かれつ!」

「だからつていきなり告白なんて早過ぎるでしょ! それじゃあ十段跳びだ!」

「十段跳びのなにが悪い!」

鼓膜を激震させる声。しかし亮一はケータイを離さず、彼女の言葉に耳を傾ける。

「私は自分の直感を信じている! それにお前のことも探偵を雇つて調べた!」

「えー!」

探偵なんてドリマやマンガでしか活躍しない存在だと想つていたのに、まさかその手腕が自分に發揮されるとほ……。

「その結果は、見事合格だ! めでとう!」

唚然としてケータイを落としたそつた亮一に、明日香が言った。とても偉そう。まるで断られないと確信しているかのよつ

なんの試験だよ！ と叫びやつになつた彼は、ふと思い立つてベッドから降り、窓に駆け寄る。

最初、明日香は「部屋にいることは調べがついてる」と言つた。もしかすると、家の前に探偵がいるかもしれないと思つたのだ。カーテンを開け、一階から見下ろす。

「よつ！」

軽く手を挙げた人物の口の動きと、電話から聞こえた声が一致した。

玄関前にいたのは、探偵ではない。

明日香本人だった。

「な、なにやつてんの？」

「恋人同士ともなれば、親御さんへの挨拶は基本中の基本だらう？ だから来たのだ！」

亮一はがくりと肩を落とす。

つていうか、まだ返事もしてないのに…

明日香の早急さに愕然としつつ、亮一は「今日はどうか帰つてください」という意味の台詞を吐きついた。

「お邪魔するぞ」

だが、彼女はインター ホンを押してしまった。

ピンポーンといつ軽やかな音色と、「はーいー」といつ母親の声が足下から伝わる。

玄関のドアが開く音がした。

「あら、どなたかしら？」

「夜分遅くにすいません」

不味い。亮一は本能的に危機を察し、部屋を飛び出して階段を駆け下りたが、間に合わない。

「わたくし、亮一君の恋人で、時倉明日香と申します」

深々と頭を下げた明日香。ニヤニヤ笑顔で振り返った母親。なんだなんだと玄関へ集まってきた父親や妹。顔面蒼白の亮一。

「どうぞ、よろしくお願ひします」

十段跳びで現れた明日香は頭を上げ、満面の笑みを浮かべた。

その笑みは流石学園の一、一を争う美貌を誇り、庶民たちは輝く
ような笑顔が眩しく、目を細める。

「とりあえず上がつて頂戴。お茶を出すわ」と、母親が慌ててキッ
チンへ向かう。

「「」こちへど「」と、妹がやや緊張した面持ちで促す。

「お邪魔します」と、明日香がリビングへ入る。

「やるなあ亮一！ あんなべっぴんさん捕まえて来るなんて！」と、
父親がはしゃぎ、リビングへ戻る。

果然とする亮一は、ケータイを耳に当てたままだと「う」とに氣
付いた。通話中の電話口から、明日香の息遣いが聞こえてきたのだ。
彼女は、言つた。

「これからよろしく！」

亮一以外の家族が「ようしきー」と返している。

その場に膝から崩れ落ちた亮一は、「ハ、ハ……」と渴いた笑い
声を漏らした。

まるで台風だ。亮一の穏やかな夜のハッピータイムは乱され、な
んだかよく分からぬにせつたに家にまで上陸され、親諸共強風に巻き
込まれている。

「そんなどころでなにせつてるんだ？ ほら、立てるか？」

振り返ると、明日香が微笑を浮かべ、手を差し出していた。

亮一はほんのひと頬を赤くすると、ゆっくり手を伸ばし、華奢な
手を掴む。

「しつかりしる。私の恋人だらう？」

「いやいや、まだ返事してないでしょー！」

立ち上がった亮一が怒鳴ると、明日香は「やつだった！」と目を
剥いて慌て始めた。

亮一は、つい噴き出しちしまつ。

「笑うなっ！」

「「」めん」「めん。でもおかしかつたから

綻ぶ口元は抑えられない。明日香は「へへう、じへじつた……」

とぼやき、居場所なさげに視線を逸らす。

「まあ、あとで返事送るから。今日は帰つ……」

「それはつまりYESといつことだな?」

「それは違……」

「なら安心だ! なにも問題はない!」

「あるでしょ!」

「照れるな照れるな」

亮一を置いて、明日香はリビングの家族の下へと向かった。

両親は結婚の話題を剛速球で投げ込み、妹はすでにお姉ちゃんと呼んでいる。

そういうあいつ、お姉ちゃんが欲しいってずっと言つてたなあ……。

ぽんやり考えた亮一はぶんぶんぶんと首を振る。

名前と顔しか知らないクラスメイトと結婚なんて……。

「これじゃあ千段跳びだ!」

誤解を解くため、亮一は気合を入れてリビングへ駆け込んだ。

そして、明日香と問答を繰り返しながら家族に対して訴えたのだが、家族からしてみれば、それは夫婦漫才のようで、とても微笑ましかったという。

おしまい

(後書き)

続きを書きました。

http://ncode.syosetu.com/n1277

x /

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0025w/>

十段跳びのなにが悪い！

2011年10月13日03時21分発行